

沖縄FW5日目（2011年10月12日）

「辺野古から国際通りパレードへ」

文責 アメリ・コーベル

今日は10月12日の水曜日だ。平和学習の二日目。頑張ろう！

朝起きたら、ゼミの皆さんも嬉しく思ったと思うが、久しぶりのいい天気だった。沖縄の観光の様子もついに見られた。良かった。

9時には、バスに乗って一日が始まる。今日のガイドもあきちゃんとあき子ちゃんだ。よろしくお願いします。

最初のスポットは米軍基地の問題をめぐって全国的に有名になった辺野古だ。どんな町もこのような形で有名になりたくないだろう。説明が始まる前に、目に入るのは辺野古の素晴らしい海だ。天気がよかったおかげで、あの綺麗な景色の中で米軍基地を拡大することがどんなに勿体無いことかすぐに分かった。



ジュゴンが住むこの美しい海に米軍基地を作る計画に反対し、浜辺では座り込み運動が続けられている。座り込み運動の浦島悦子さんにお話を伺った。辺野古は、沖縄に存在する南北格差・東西格差のなかの周辺地域として基地問題を抱え込まれてきた。政治に翻弄されてきた辺野古では基地に反対することが非常に困難であったのだ。その辺野古の住民が住民投票や市長選を通してはっきりと「基地ノー」の意思表示をしたことの意味は大きい。そのなかで、出身が辺野古ではない浦島さんご自身は、海や山に対して自らが持つ愛着・感謝の気持ちを確認し、生活の基盤

となるこの海や山を自分の孫の代までも大切にしたいという思いで「基地ノー」の意思を固くしてきた。（下線部代筆・柏崎）



説明を聞いてから、浦島さんと一緒に現在の米軍基地の様子を見に行った。米軍基地と言うよりも境界線にいったと言うほうが正しいかもしれない。目の前にあったのが様々な色のリボン付きの格子だった。近づけば近づくほど、リボンに米軍へのメッセージが書かれていることが分かる。



私たちも自分で作ったりボンを掛けた。私は「Go back home and enjoy your family」というメッセージを書いた。基地が欲しくないことを伝える他にアメリカの軍人もきっと辺野古よりも自分の家族がいる故郷に暮らしたいだろうという思いを込めて書いた物だ。残念なことに、米軍の当局がそのリボンを迷惑に思っ、来週から残っているリボンを取って捨てることにしたそう。

バスで帰ろうとしたら、昼ごはんを売っている女性に会い、500円で三種類のサンドイッチを買うことができた。安くて美味しそうな昼ごはんだった。後でそれを食べると、どんなにいいチョイスか分かった！私とフレデリックさんの二人のフランス人が満足したぐらいの美味しいパンだった。どうしてこのような片田舎に東京でも見つけにくいような美味しいパンがあるか不思議だけど。。。

次の目的地は嘉手納基地だ。嘉手納基地は前の辺野古米軍基地と違って、住民の土地に建設されたものではなく、もともと日本軍の基地だった。戦後、当然のようにアメリカに占領されたものだ。米軍基地をめぐる問題について、あき子さんが指摘したのが騒音公害だった。夜には航空機が離着陸しないことになっているものの、米軍の人たちは規則をよく破っているそう。

私たちは夜の様子を見られなかったのだが、基地の横に立っていた15分のうちに、何回も何回も航空機の離着陸の騒音を聞いた。あき子さんが「touch and go」という訓練の説明をしていた同じ時に、目の前で行われていたことは皆に大きな影響を与えただろう。その時に、「本当だ！基地は本当にこういうものなんだ」と思った。その「touch and go」という訓練は航空機が着陸しようとしてから、もう一度、離陸することから成り立っている。結果は毎10分のうちに5回以上同じ航空機の離着陸の騒音を聞くということだ。私たちもその経験をした。ただし、私たちがいた

沖縄FW5日目（2011年10月12日）

場所は滑走路の横にあるため、一番騒がしいところではないそう。滑走路の先端に住んでいる住民にはもっと騒がしいそうで、毎日が苦痛だろう。テレビを見ていたら、何も聞こえなくなる。友達と話していたら、相手の言うことを口の動きによって想像するしかなくなる。それが2分毎くらいに行われるため、毎日の生活でどのくらい面倒か想像できる。



時間が少なかったため、基地のそばにある資料館には行けなかったが、十分状況を理解できたと思う。

次の目的地に向かっていた時に、周りの様子を見たら、数多くの Y ナンバープレートがあった。Y ナンバープレートというのは米軍の人たちの特別なナンバープレートだ。車の運転手の姿を見てみたら、半分は米軍の制服を着ていた男性で、その他はアメリカ人ぽい女性達だった。軍人の妻なのではないかと思った。

その様子は何キロもずっと続いた。そして、英語で書いている店の名前と情報などでアメリカ人の存在を感じられる。よく覚えているのがドコモの店のショーウィンドーに貼ってあった「We always welcome English speakers」と言う大きな広告だった。

もうちょっとバスで進んだら、道路の両側に米軍基地がある所があつて、あまりにも変な感じがした。有刺鉄線に取り込まれているかのようだ。それを見て、沖縄はまだ「戦後0年」にあることがわかった。米軍の存在はいつ終わるのだろうか？

三番目のスポットはチビチリガマという「集団自決（強制集団死）」が行われたガマである。そのガマに避難した住民は、140 名中 83 名も自決した。自決した避難者中の 6 割が 12 歳以下の子ども達だった。どうして降伏するよりも自分の命と親戚の命を奪うことにしたのだろうか？それはあまりにも難しい質問であり、簡単に答えられない。しかし、一つの大きな理由といえば、そのガマに避難していた従軍看護婦と元日本兵がいたからであろう。彼達の共通点は日本の侵略戦争に参加し、日本兵が捕虜に行ったことを経験していたことだ。その悲惨さを住民に語って、アメリカ兵が鬼畜であると説得したせいで多くの住民達がアメリカ軍に捕まるよりも自分の手で死んだほうがましだと思うようになったわけだ。

その集団自決を生き延びた人々は 38 年間真相を誰にも言わずに、黙秘し続けた。ガマで行われた惨事を説明したくても言葉にできないし、自分の子どもを殺した母親にとっては伝えるのがあまりにも苦しいなどの理由でこれは読谷村の秘密になっていた。1983 年に経験者が話し始めて、真相が明らかになった。

ガマのほうに着いたら、最初に気付くのが大きなモニュメントだ。二階のモニュメントで、一階は壁で囲まれており、像の姿をよく見られない。それはモニュメントが初めて作られた時から姿が変わっているからだ。「日の丸焼き捨て事件」で極右の人たちがチビチリガマのモニュメントを壊したことで、読谷村の住民達が大きい衝撃を受け、悲惨な集団自決で命を落とした親戚がもう一度殺されたように感じていた。それ以来、ガマに入ることが禁止されている。私達も外からのガマの様子しか見られなかったが、禁止されたことで戦争と集団自決に関する苦しみを良く感じられないのではないかと思った。



チビチリガマを見学してから、もう一つのガマに向かった。前のガマと違って、シムクガマでは死傷者一人も出すことがなく、皆アメリカ軍の収容所へ保護された。なぜかと言うと、今回の場合は元日本兵がいなかった一方で、ハワイから帰ってきた二人の男性がいたからである。その二人はもちろん英語を話すことができて、米兵とコミュニケーションをとることができた。そのおかげでシムクガマに避難した約1000名が自決へのプレッシャーをあまり受けなかったし、米兵達と話せることが出来る人がいることで、少しでも安心できたのかもしれない。外国に留学している私はその話を聞いて感動した。やはり、違う文化の人々の間に橋を架けられる人は大変大事であることが分かった。特に、戦争のような相手を信頼しにくい時には。

シムクガマの見物で平和学習が終わった。沖縄国際大学の皆さんが一所懸命資料を作ったり、説明したりしてくださったおかげで、大変勉強になった。ありがとうございました。

そしてこれから第5回世界のウチナーンチュ大会が始まる。

私たちは世界のウチナーンチュ大会の参加者のパレードが行われている国際通りへ向かった。自由に好きな参加者と話したり、世界の踊りを見たり、世界の音楽を聴いたりすることで、元沖縄出身だった多くの移住者の様子を味わえた。アメリカ、ハワイ、アルゼンチン、ブラジル、コロンビア、ペルー、東南アジアなどから来た参加者の元気さと暖かさでお祭りの雰囲気を感じられた。

フランスから来た人もいた。ある女性に話しかけたら、彼女が移住者の一世で、勉強のためにフランスに来たということが分かった。私がブルターニュ人であることを説明したら、「あ、そうですか？実は私はレンヌでブルターニュ語を勉強しましたよ。フランスの地域的な言語を学ぶためにフランスに留学したんです。」と彼女は答えた。

沖縄FW5日目（2011年10月12日）

・・・やはり、世界は狭い！

第5回世界ウチナンチュ大会の第一印象はとてもいいものだった:)